「陸の物語」を腑分けする

—「原 - 白鯨」抽出のための試論①—

佐藤　憲一

1. はじめに

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の『白鯨』（*Moby-Dick; or, the Whale*）が、小説であることを自ら放棄するような小説であることは、出版当初から自明であった。1851 年 11 月 22 日、メルヴィルの友人でもあったエバート・ダイキンク（Evert Duyckinck）は、*Literary World* 誌上において、アメリカで出版されたばかりの『白鯨』を評し、この小説は「この上なく人目を引く海鮮料理（"sea-dish"）」であり、「哲学と、自然誌と、質の高い文章と、気高い感情と、ろくでもない諺とが混ぜこぜになった知的ごった煮（"Intellectual Chowder"）」である、と述べている（qtd. in Branch 265）。また、同年 12 月 6 日付けで *Literary Gazette* 誌に掲載された別の書評にいたっては、『白鯨』を「自らを小説であるといって憚らないヘンテコ（"odd"）な本」とした上で、「むちゃくちゃに変わっていて、怒りを覚えるほどに大げさ」である、と評している（qtd. in Branch 276）。

ダイキンクが出版早々に指摘したように、『白鯨』には、ナラティヴの進行を中断させ、また時にはナラティヴそのものを否定するような哲学的記述や自然誌的描写、さらには戯曲形式の章などといった、あらゆる雑多な要素がつめこまれている。もちろん、当のメルヴィル自身も『白鯨』の破天荒さをいわば確信犯的に構築していたと考えて大きな過誤はない。第 82 章「捕鯨の名誉と栄光（"The Honour and Glory of Whaling"）」冒頭において語り手イシュメルは、「この世には細心の無秩序こそが真の方法であるような企てがあるものである」（(中) 389[1] 注）と喝破するが、この言明は第 82 章の主題である捕鯨業に差し向けられたものであると同時に、『白鯨』という小説のありかたそのものにも照準を合わせていることは言を俟たない。

『白鯨』は「巨大にして、乱雑な書物（"mighty, messy book"）」である、とは、ピーコッド号出港の地ナンタケット在住の当代ベストセラー作家、ナサニエル・フィルブリック（Nathaniel Philbrick）著『なぜ『白鯨』を読むのか』（*Why Read Moby-Dick*; 2011）における評言であるが、この巨大さと乱雑さこそが出版当初から今日に至るまで『白鯨』を『白鯨』たらしめているということは、ここであらため

て指摘するまでもないだろう。しかし、その陰に隠れてはいるものの、『白鯨』には、一応の一貫性を保っているように見える部分もある。それは、「陸の物語（Land Narrative)」と呼ばれる第1章から第22章、つまり、語り手イシュメル（Ishmael）がニューヨークからナンタケット島に渡り、ピーコッド号と乗船契約を交わし、出港するまでの物語である。『白鯨』の全135章を5つの属性に「解体」した八木敏雄『『白鯨』解体』においても、第1章から第22章は単なる「物語」に分類されており、「その前後の一連の章とはかなり異質」（八木 19）な第23～第25章のいわば助走的な役割が、つまり、「巨大で乱雑な書物」の序章としての役割が、割り振られているに留まる。

たしかに、『白鯨』を鳥瞰的にみるなら、「陸の物語」については、ひとまずはそのような理解で十分であろう。しかし、微視的にみてみると、この一見すれば一貫性をもっているかのようにみえる「陸の物語」にも、ナラティヴのよどみない進行を妨げるいくつかの痕跡が見てとれる。これまでその典型的な例として指摘されてきたのが、バルキントン（Bulkington）とエライジャ（Elijah）という2人の登場人物である。具体的には、第3章「潮吹き亭（"The Spouter Inn"）」に、さも意味ありげに登場するバルキントンは、その後の「陸の物語」ではいちども言及されないまま、第23章「風下の岸」で「墓石なき墓標」（(上）281）のもとに葬られてしまう。また、第19章「預言者」に登場するエライジャは、「エイハブ船長が全快するなら、わしのこの左腕も全快するだろう」（(上）253）と述べ、初登場の時点ではその左腕に何らかの障害があることが暗示されているにもかかわらず、第21章「上船」の冒頭では、イシュメルとクイーケッグの「あいだにたくみにすべりこみ」ふたりの「肩に手をかけ」てしまっている（(上）264)。仮に左手が悪ければ、こういうことはできないはずである。このように、「陸の物語」とて、文字通り一筋縄ではゆかない。

これらの例を根拠に、ジョージ・R・スチュアート（George R. Stewart)、ジェームズ・バーバー（James Barbour)、そして八木敏雄の3人のメルヴィル研究者は、現存する『白鯨』には、その原型となった版、つまり「原 - 白鯨」が存在したという説を提唱している。その概要をここにまとめておこう。

> 「原 – 白鯨」は、1850年の2月にメルヴィルがヨーロッパから帰国したすぐあとに着手され、同年8月にはほぼ書き終えたとされる、作者自身の体験を土台にした、簡潔な捕鯨の物語である。捕鯨船の船長はエイハブではなくピーレッグ、語り手は単なる一人称の "I" で、イシュメルという名はついていない。彼の親友はクィーケグで はなくバルキントンであり、彼らが乗り組む捕鯨船は

沈没することなくどこかの港で航海をおえる。

つまり、現存する『白鯨』は、この「原－白鯨」を土台とし、そこに新たな物語が組み合わされ、さらには、物語とはほぼ無関係な各種記述が次々と付け加えられていった結果、できあがったということである。この見方は今日ではほぼ定説となっているといってよい。

では、どこが「原－白鯨」で、どこがあとから書き加えられた部分なのか。「原－白鯨」をいわば「腑分け」する作業は、これまで一度も体系的には試みられたことがない[2]。その理由のひとつに、『白鯨』には自筆原稿が現存しないことが挙げられる。しかし、軸となる仮説を設定し、パラグラフのレベル、そして、センテンスのレベルにまで掘り下げた考察と分析を展開すれば、「原 - 白鯨」を腑分けする一定の説得力のある推論を展開することができるのはないだろうか。以下、本稿では、これまで試みられることのなかったこの作業、つまり、「原－白鯨」を「腑分け」する作業を、一見すれば一貫性があるように見える「陸の物語」に焦点を絞って、試みてみたい。そうすることで「細心の無秩序」の実際のありようを解明し、『白鯨』という巨大なナラティヴの成り立ちを追跡することが本論を通じての目標となる。

2. 混在するふたつのナラティヴ

ここでは手始めに、「陸の物語」の章の中でも、ふたつのナラティヴの混在と、それに伴う混乱が如実にみてとれる第 20 章「出港準備（"All Astir"）」の冒頭部を解析してみたい。

第 20 章は明らかに第 19 章「預言者（"The Prophet"）」をうける形で始まるが、『白鯨』校訂版テクスト（Northwestern University Press and the Newberry Library 版；以下「NN 版」と記す）の脚注が指摘するように、この章の冒頭 2 つのパラグラフは、時間の連続性という観点から考えるときわめて不安定なものとなっており、また内容的にも少々落ち着きの悪い記述がみうけられる。以下、NN 版のテクストの全文を引用し、さらに、NN 版の注を参照しながら、この 2 つのパラグラフのあいだの矛盾と、これに起因する問題を確認しておきたい（以後、引用文中の下線は全て筆者による）：

第 20 章 第 1 パラグラフ

A day or two passed, and there was great activity aboard the Pequod. Not only were the old sails being mended, but new sails were coming on board, and bolts of

canvas, and coils of rigging; in short, everything betokened that the ship's preparations hurrying to a close. Captain Peleg seldom or never went ashore, but sat in his wigwam keeping a sharp look-out upon the hands: Bildad did all the purchasing and providing at the stores; and the men employed in the hold and on the rigging were working till long after night-fall. (95) [3]

第20章 第2パラグラフ

On the day following Queequeg's signing the articles, word was given at all the inns where the ship's company were stopping, that their chests must be on board before night, for there was no telling how soon the vessel might be sailing. So Queequeg and I got down our traps, resolving, however, to sleep ashore till the last. But it seems they always give very long notice in this cases, and the ship did not sail for several days. But no wonder; there was a good deal to be done, and there is no telling how many things to be thought of, before the Pequod was fully equipped. (95)

ここで2つのパラグラフのあいだの矛盾を整理すると、つぎのようになる。

まず、時間の接続関係についてみてみよう。第1パラグラフは「1日か2日がすぎた（"A day or two passed"）」ではじまる。では、その基点はいつかというと、前の章とのつながりから、クイーケッグが契約書にサインをした日（第18章～第19章）と考えられる。一方、「クイーケッグが契約書にサインをした翌日（"On the day following Queequeg's signing the articles"）」ではじまる第2パラグラフも、おなじ日を基点とした語りであると考えるのが自然である。NN版の注が「不釣り合い」と指摘しているのは、このふたつの記述の関係である：

A discrepancy appears between this phrase [On the day following] and the clause introducing the previous paragraph, " A day or two passed." The awkward handling of time sequence in the whole chapter possibly reflects separate stages in its composition.(845)

原理的には、第20章は、クイーケッグが契約書にサインをし（第18章）、その帰り道にイライジャと遭遇（第19章）した「1日か2日」後からでも、あるいは、単にその「翌日」からでも、始まることができる。しかし、第20章の冒頭では、本来であればひとつでよいはずの時間的連続を形作る節と句が重複し、しかも、そ

れらが隣り合うかたちで布置されている。その結果、第20章とそれ以前の章との時間的連続性は、極めて不安定になってしまっている。

こうして、第20章冒頭において時間的連続性がいったん失われてしまうことにより、本来は第20章末尾と第21章冒頭とをつなぎあわせるはずの時間に関わる副詞および副詞句も、以下に見るように明確な指示対象を失ってしまう。

第20章は語り手がクイーケッグとともに船に乗り込むために「にこみ亭（"Try Pots"）」という宿屋をあとにする場面で幕を閉じるが、ここで語り手はつぎのように話す：

> At last it was given out that some time next day the ship would certainly sail. So next morning, Queequeg and I took a very early start. (97)

また、第21章に進んで、語り手がエイハブの乗船を確認する場面には、次のようにある：

> "Shipped men," answered I, "when does she sail?"
> "Aye, aye, ye are going in her, be ye? She sails today. The Captain came aboard last night"
> "What Captain? —Ahab? "
> "Who but him indeed?" (100)

一見、はっきりとある時点を指示し、ナラティヴの時間的連続性を形作っているかのようにみえるこれらの「翌朝」「明日」「今日」「昨夜」という語句は、実際のところ、明確な指示対象をもち得ない。第20章冒頭における時の起点の不確かさのために、「翌朝」「明日」「今日」「昨夜」がいったいいつなのか、明確には指し示すことができなくなっているのである。

ところが、第22章「メリークリスマス（"Merry Christmas"）」に進むと、ピーコッド号が「日の短い、酷寒のクリスマス」（(上) 275）の日に出港した、ということが高らかに宣言される。最終的にはエイハブ船長もろとも海に沈みゆくピーコッド号を、わざわざクリスマスに出港させた物語的意味については様々な推測ができるだろうが、そこには小説執筆上のより実際的な理由も潜んでいたはずである。つまり、ピーコッド号をあえて「クリスマス」という明確な指示対象をもつ日に出港させているのは、そこにいたる時間的連続性の不備を解消するため、いや、より正確には、第20章冒頭における時間に関係する語句の不必要な重複と、それに起

因する時間的連続性の混乱とを、隠蔽するためなのではないか。

さらに、第20章の第1パラグラフおよび第2パラグラフにおいては、この種の不必要な重複をもう一例確認することができる。それは、語り手がそれぞれのパラグラフで船の準備に言及するくだりである。

第1パラグラフで語り手は、「ピーコッド号の甲板には活発な動きがみられ（"there was great activity aboard the Pequod"）」ており、「すべての兆候が船の出港準備が終わりに近づいていることを物語っていた（"everything betokened that the ship's preparations hurrying to a close."）」と述べている。

それにもかかわらず、第2パラグラフでは「ピーコッド号を完全に艤装するまでには、なすべきこと、配慮すべきことが山積していた（"there was a good deal to be done, and there is no telling how many things to be thought of, before the Pequod was fully equipped"）」ということになっている。ある船の「出港準備が終わりに近づいている」にもかかわらず、「なすべきこと、配慮すべきことが山積してい」る、というのはあきらかに不自然である。

試みに第2パラグラフと第3パラグラフとのつながりを見てみよう。第3パラグラフでは、捕鯨船が必要とするさまざまな物品についての記述が続いていることがわかる。これは結果的に第2パラグラフの「なすべきこと、配慮すべきことが山積してい」る船の記述を引き継ぐ形になっていることは明白である。そしてその副作用として、第1パラグラフで言及される「出港準備が終わりに近づいている」船は、あたかも別の物語に登場する別の船であるかのように、忘れ去られてしまう。

いったい、ピーコッド号の準備はいつ始まり、いつ終わるのか。また、その準備はすぐにおわるのか、それとも、終わるまでにはしばし時間がかかりそうなのか。『白鯨』のテクストが今のままである限り、これらの疑問には永遠に答えることができないだろう。むしろ、ここでにわかに現実性を帯びてくるのは、『白鯨』にふたつの系列のナラティヴが混在している可能性である。時間に関する語句と、乗船の準備についての記述が、それぞれ別のパラグラフに重複して、しかも整合性のない形であらわれることで、ナラティヴの時間的連続性を澱ませている第20章の冒頭部こそ、「原－白鯨」を腑分けするための最良の入口に他ならないのである。

3.「原－白鯨」を腑分けする—第20章の場合

以上をふまえて、全8つのパラグラフからなる第20章を「原－白鯨」とそうではない部分とに、腑分けしてみよう。以下、便宜的に、「原－白鯨」と推定される

ナラティヴの系列を「A 系列」とよび、また執筆のよりあとの段階で「原 – 白鯨」につぎはぎされたと推測されるナラティヴの系列を「B 系列」とよぶこととする（なお、本稿末尾に参考資料として『白鯨』第 20 章全文を掲載しておくので、適宜参照されたい）。

第 1 パラグラフ

ピーレッグが船長然とした態度で出港の準備を見守っていることがわかる：

> Captain Peleg seldom or never went ashore, but sat in his wigwam keeping a sharp look-out upon the hands.... (95)

本稿 1. のセクションでまとめておいたように、「原 – 白鯨」においては、捕鯨船の船長はエイハヴではなく、ピーレッグであったと推定される。そのため、このパラグラフは A 系列に属すると考えられる。

第 2 パラグラフ

ここには、クィーケッグが 2 度登場する。同じく先のまとめによれば、クイーケッグは「原 – 白鯨」には登場しない。よって、すくなくともこの部分は「原 – 白鯨」のままではないと考えられる。よって、このパラグラフは B 系列に属するものと思われる。

ちなみに、A 系列に属するナラティヴでは船はいまにも出港する段階にあるのにたいし、B 系列に属する ナラティヴでは、船の出港までにまだすこし時間がかかりそうである、という点にもあらためて注意する必要がある。

第 3 パラグラフ

ここでは、航海の必要品が羅列されている。内容的には、第 2 パラグラフを直接的に引き継いでいる。たくさんの物品を積み込むからこそ「船は数日のあいだは出港しない（“The ship did not sail for several days”）」のである。よって、このパラグラフは B の系列に属する。

第 4 パラグラフ

第 1 文には、つぎのようにある：

> At the period of our arrival at the Island, the heaviest stowage of the Pequod had

been almost completed .... (96)

これは、船は、あとは細々としたものを積み込みさえすればすぐにでも出港できる状態であったということを意味する。よって、ここはひとまずはA系列とする。

しかし、直後には、出港が数日あとになる可能性も示されている：

> But, as before hinted, for some time there was a continual fetching and carrying on board of divers odds and ends of things, both large and small. (96)

この記述は、ふたつのナラティヴの間のつじつまをあわせるために改変が施された場所、より具体的には、このパラグラフは、もとはA系列に属していたが、B系列のナラティヴとつじつまをあわせるために、加筆修正が施された場所、であると推測される。よって、このパラグラフには、A系列およびB系列が混在すると考えられる。

第5パラグラフおよび第6パラグラフ

ビルダドの妹とされるチャリティが登場する。彼女が船の準備に精を出す姿は意味的にB系列に属するようにみえるが、第6パラグラフの終わりでピーレッグはこれから出港する船の船長としての威厳を保っている：

> Every once and a while Peleg came running out of his whalebone den, roaring at the men down the hatchways ... concluded by roaring back into his wigwam. (96)

よってこれらのパラグラフは、A系列に属すると解する。

第7パラグラフ

第1文「準備の日々のあいだ（"During these days of preparation"）」は第2パラグラフの「船は数日間、出港しない」に呼応する。また、ここにはエイハブが登場する。これらふたつの理由から、このパラグラフはB系列に属するものと考えられる。もっとも、ここにはビルダドとピーレッグが登場するが、ここでのピーレッグには、これから出港する船長の威厳はない：

> ...meantime the two Captains, Peleg and Bildad, could attend to everything necessary to fit the vessel for voyage. (97)

よって、この箇所は執筆のより後の段階に書き加えられたとみるのが妥当である。

第8パラグラフ

このパラグラフにはわずか2つの文しかない。しかし、それにもかかわらず、上で確認しておいたとおり、そのどちらの文にも次の章との時間的連続性を担保するための語句（“some time next day”）が埋め込まれている。この、不自然なまでの時間的連続性への意識は、かえって、時間的連続性に不備があることに対する強い危惧の現れではないか。だとすれば、このパラグラフは、あとから継ぎ接ぎされたもの、つまりB系列に属すると考えられる。

4. まとめと今後の展望

以上の分類をふまえて、AB両系列のナラティヴをそれぞれ別個に進行させてみよう。

まず、A系列、すなわち「原－白鯨」の痕跡をあきらかに残すナラティヴ（括弧内は第20章のパラグラフ番号を表す）は次の通りに展開する：

> 船は出港の準備でごったがえしているが、これは準備がもうすぐ終わろうとしていることを示す（1）。この船の準備を監視しているのはピーレッグ船長である（1）。われわれがナンタケット島に到着したときにはすでに重たいものの積み込みは終わっており（4）、残りのこまごまとしたものの調達は主としてビルダドの妹であるチャリティーが担当していた（5～6）。

つぎにB系列、すなわち執筆のよりあとの段階で組み込まれたと推測されるナラティヴは、このように進行する：

> ピーコッド号の出港の準備が整うまでにはまだまだやるべきことがたくさんあるので、船は数日のあいだは出港しない（2）。航海が長期にわたる捕鯨船では、積みこむべき日常品はあまりにも多いのだ（3）。こうした準備の日々にクィーケッグと私は足繁く船を訪れては、エイハブについて詮索していた（7）。いちども船長を見ないまま出港するのは不安でもあるが、明日船はいよいよ出港するらしい（7）。

今回の作業で確認できたのは、①一見すれば直線的に進行するようにみえる「睦

の物語」のナラティヴのなかに、このようなふたつの系列のナラティヴが共存していること、また、②そのせいで時の副詞の指示対象が決定不能に陥り、ナラティヴの時間的連続性が不安定になってしまうという不具合が生じていること、の2点である。そして、その不具合はおそらく作者によって十全に認識されており、ピーコッド号をあえてクリスマスの日に出港させるという対症療法的な解決策も提示されていることも確認できたといってよいだろう。

『白鯨』のナラティヴは、このように、大きな矛盾や葛藤、そして不具合を湛えながら、とにかく前へ進むことで成り立っている。いや、より正確には、前へ進むことでしか、成り立っていないのだ。それはあたかも、一旦停止すればバランスが崩れて倒れてしまう一輪車のような、不安定さと力強さとを兼ね備えた動的均衡のなせる業であるといってもよいだろう。

すくなくとも「陸の物語」に関して今後取り組むべき課題は、それぞれの章、パラグラフ、文、そして語を可能な限り逐一検討したうえで分類を進め、それを上にまとめたふたつの系列のナラティヴに接ぎ木してゆくことである。その際、語り手がニューベッドフォードに到着してから第5日目までは時間的な連続性が完全に保持されているという事実にとくに留意したい（表1参照）。この、あまりにも完璧すぎてかえって不自然にもみえるナラティヴの進行は、「原－白鯨」が静かに、しかし確かに隠蔽されている痕跡ではないだろうか。今後の作業は、わずかではあるが残存する外的証拠（メルヴィルの日記の類、および、貸し出し図書の記録）も視野に入れつつ、こうした観点から進められてゆくことになるだろう。

「原－白鯨」とそこに後から継ぎ接ぎされたナラティヴが、現存する『白鯨』に組み替えられるプロセスは「細心の無秩序」の産物なのか、それとも、単なる不注意なのか。『白鯨』のナラティヴという動的均衡を一旦停止させ、分解した先には、その巨大さを根拠づける理論と実践とが立ち現れてくるに違いない。

〔表１〕

	行動および出来事（　）内は章を表す
第１日	12 月のある土曜日、マンハッタンからニューベッドフォードに到着（2） クイーケッグと出会う（3）
第２日	礼拝堂でマプル神父の説教を きく（7-9）
第３日	月曜日の朝、ニューベッドフォードを発つ（13） 夕方遅くにナンタケット島に到着（14/15） 寝る前、クイーケッグから捕鯨船の選定を一手に任される (16)
第４日	早朝、乗り込む捕鯨船を探しに行く（16） クイーケッグのラマダン始まる（16） ビルダド、ピーレッグと出会い、乗船契約を結ぶ（16）
第５日	明け方、クイーケッグのラマダン終わる（17） クイーケッグをピーコッド号に連れて行く（18） クイーケッグが乗船契約を結ぶ（18） イライジャとの遭遇〔1 回目〕(18)

注

1. 以下、『白鯨』の翻訳は八木敏雄訳（上中下巻 岩波文庫 , 2004）により、( ) 内に上中下巻の別とページ数を明記する
2. 例外的には、八木敏雄は『『白鯨』解体』において、『白鯨』冒頭の Call me Ishmael の直後に「スラッシュ（／)」の記号が隠れている可能性を示唆している（124-5)。
3. 以下、*Moby-Dick* 原文からの引用は Northwestern University Press and the Newberry Library 版により、( ) 内にページ数のみを記す。

参考文献

Barbour, James. "The Composition of Moby-Dick." *American Literature.* 47 (1975): 342-360.

Branch, Watson G. ed. *Melville: the Critical Heritage*. London: Routledge, 1974.

Hayford, Harrison. "Unnecessary Duplicates: A Key to the Writings of *Moby-Dick*." *New Perspective on Melville.* Ed. Faith Pullin. Edinburgh: Edinburgh UP, 1978. 128-161.

Melville, Herman. *Moby- Dick; or, the Whale.* Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1988.

----. ハーマン・メルヴィル『白鯨』（上）（中）（下）八木敏雄訳 岩波文庫 , 2004.
Philbrick, Nathaniel. *Why Read Moby-Dick.* New York: Viking, 2011.
Stewrat, George R. "The Two *Moby-Dicks*" *American Literature.* 22 (1954): 417-448.
Yagi, Toshio. 八木敏雄『『白鯨』解体』研究社 , 1986.

〔参考資料：『白鯨』第 20 章 全文〕

A day or two passed, and there was great activity aboard the Pequod. Not only were the old sails being mended, but new sails were coming on board, and bolts of canvas, and coils of rigging; in short, everything betokened that the ship's preparations were hurrying to a close. Captain Peleg seldom or never went ashore, but sat in his wigwam keeping a sharp look-out upon the hands: Bildad did all the purchasing and providing at the stores; and the men employed in the hold and on the rigging were working till long after night-fall.

On the day following Queequeg's signing the articles, word was given at all the inns where the ship's company were stopping, that their chests must be on board before night, for there was no telling how soon the vessel might be sailing. So Queequeg and I got down our traps, resolving, however, to sleep ashore till the last. But it seems they always give very long notice in these cases, and the ship did not sail for several days. But no wonder; there was a good deal to be done, and there is no telling how many things to be thought of, before the Pequod was fully equipped.

Every one knows what a multitude of things—beds, sauce-pans, knives and forks, shovels and tongs, napkins, nut-crackers, and what not, are indispensable to the business of housekeeping. Just so with whaling, which necessitates a three-years' housekeeping upon the wide ocean, far from all grocers, costermongers, doctors, bakers, and bankers. And though this also holds true of merchant vessels, yet not by any means to the same extent as with whalemen. For besides the great length of the whaling voyage, the numerous articles peculiar to the prosecution of the fishery, and the impossibility of replacing them at the remote harbors usually frequented, it must be remembered, that of all ships, whaling vessels are the most exposed to accidents of all kinds, and especially to the destruction and loss of the very things upon which the success of the voyage most depends. Hence, the spare boats, spare spars, and spare lines and harpoons, and spare everythings, almost, but a spare Captain and duplicate ship.

At the period of our arrival at the Island, the heaviest storage of the Pequod had been almost completed; comprising her beef, bread, water, fuel, and iron hoops and staves. But, as before hinted, for some time there was a continual fetching and carrying on board of divers odds and ends of things, both large and small.

Chief among those who did this fetching and carrying was Captain Bildad's sister, a lean old

lady of a most determined and indefatigable spirit, but withal very kindhearted, who seemed resolved that, if she could help it, nothing should be found wanting in the Pequod, after once fairly getting to sea. At one time she would come on board with a jar of pickles for the steward's pantry; another time with a bunch of quills for the chief mate's desk, where he kept his log; a third time with a roll of flannel for the small of some one's rheumatic back. Never did any woman better deserve her name, which was Charity—Aunt Charity, as everybody called her. And like a sister of charity did this charitable Aunt Charity bustle about hither and thither, ready to turn her hand and heart to anything that promised to yield safety, comfort, and consolation to all on board a ship in which her beloved brother Bildad was concerned, and in which she herself owned a score or two of well-saved dollars.

But it was startling to see this excellent hearted Quakeress coming on board, as she did the last day, with a long oil-ladle in one hand, and a still longer whaling lance in the other. Nor was Bildad himself nor Captain Peleg at all backward. As for Bildad, he carried about with him a long list of the articles needed, and at every fresh arrival, down went his mark opposite that article upon the paper. Every once in a while Peleg came hobbling out of his whalebone den, roaring at the men down the hatchways, roaring up to the riggers at the mast-head, and then concluded by roaring back into his wigwam.

During these days of preparation, Queequeg and I often visited the craft, and as often I asked about Captain Ahab, and how he was, and when he was going to come on board his ship. To these questions they would answer, that he was getting better and better, and was expected aboard every day; meantime, the two captains, Peleg and Bildad, could attend to everything necessary to fit the vessel for the voyage. If I had been downright honest with myself, I would have seen very plainly in my heart that I did but half fancy being committed this way to so long a voyage, without once laying my eyes on the man who was to be the absolute dictator of it, so soon as the ship sailed out upon the open sea. But when a man suspects any wrong, it sometimes happens that if he be already involved in the matter, he insensibly strives to cover up his suspicions even from himself. And much this way it was with me. I said nothing, and tried to think nothing.

At last it was given out that some time next day the ship would certainly sail. So next morning, Queequeg and I took a very early start.

(Adopted from Northwestern University Press and the Newberry Library edition; pp.95-7)